慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	服部英太郎著作集VI 社会政策総論
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.8 (1967. 8) ,p.987(153)- 988(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19670801-0153
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670801-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の基本問題は、単に証券市場の基礎範疇としてのみ提起されうるのではなく、信用形態としてとらえうることによって、信用の基本問題に深くかかわらしめて提起されるのでなければならない。

（1）株式会社が、信用関係から規定されるということは、株式会社の一面であるにすぎないという理解がある。なるほど、株式会社は、企業の形態、資本の結合形態であり、信用関係とは直接的には結びつかない。しかし、株式会社は、産業資本の資本蓄積過程に基礎をおいて形成されてくる以上、この資本蓄積過程の槓杆をなす信用と無関係ではない。また、資本論体系中に株式会社論を位置づけるうえからも、信用規定が、その基本的規定とされねばならない。

（2）商業信用は流通過程で、本来遊休すべき資本の融通関係であるとする見解（宇野弘蔵氏）やその要因のみでは、この形態の説明にとって不十分だとして、さらに信用関係の相互性をも重視する見解（日高晋氏の『商業信用と銀行信用』一九六六年、一一四頁）は、いずれも支払のための予備金を商品生産者＝産業資本家から解放するという考えに立脚している。商業信用における手形が、銀行信用から一応別個に抽象化されて論じられる場合、こうした想定にはなお、疑点が残る。

（3）銀行資本の蓄積は、信用体系と競争体系との相互規定的関連において遂行される、独自の蓄積過程である。銀行信用の担い手として、銀行は、受ける信用と与える信用による再生産過程での、個別諸資本の連関を媒介するが、同時に、その連関は、競争による産業的企業の利潤率の変動を通じて再生産されている。したがって、これを媒介する信用自体も、競争に規定されて変動を余儀なくされる。これは銀行諸資本の競争となって、銀行資本蓄積を促し、貨幣市場に作用を及ぼすことで、利子率の水準に反映する。

（4）「けだし貨幣市場では、たえず、あらゆる貸付可能な資本が総量として機能資本に対立し、したがって一方では貸付可能資本の供給と他方ではこれに対する需要との比率が、その時々の市場利子状態を決定するからである。信用業の発展にしたがってまた集中が、貸付可能な資本にたいし、一般的・社会的性格を与え、これを一挙に、同時に貨幣市場に投ずるようになればなるほど、ますますそうである。」（K. Marx, Das Kapital, Bd. III, S. 400. 訳、五五頁）というマルクスの指摘は、このさい重要な意味をもつ。とくに、銀行業の発展が、貨幣資本をますます市場に吸引せしめるという点は、銀行業の内容、銀行信用の変質自体をも、内含していると考えねばならない。

（5）銀行信用は短期的貨幣資本の融通という点で、信用体系の競争体系への対応を十分果しえない要因を基本的に有するかのごとくである。マルクスの指示にあきらかなように、銀行信用の一環としての信用創造業務は、自らこの不備を打開するものとなる。マルクスは、こうした方向に、仮空な資本の形成をみていた。

〔付記〕本稿の要旨は、今春証券経済学会関東部会で報告した。

新刊紹介

服部英太郎著作集Ⅵ
『社会政策総論』

本書は服部教授の遺稿のうち、教授が、戦前および戦後にわたる、東北大学と福島大学における社会政策講座の講義案としてつくられたノートを主要な内容としている。解題によれば、「著者が始めて社会政策論の講義を担当したのは大正一四年（一九二五年）であるが、それから昭和四〇年末（一九六五年）、急逝による講義中絶にいたるまで、ドイツ留学の二ヶ年、強権による教職剝奪、病臥生活の四ヶ年を除いて、実に三五ヶ年にわたって社会政策論の講義をつづけてきた」。尨大な分量にのぼる講義案は、それぞれの時点で著者の鋭い問題意識によって貫かれ、逐次、追補改編されているというのであるが、本書では、第一部として昭和一五年以降の講義案、第二部として、昭和二四年以降のものが集成されている。大凡の目次を示すならば、つぎの通りである。

第一部　社会政策概論
　序言　日本における社会政策理論の転回
第一編　社会政策における労働力保全
　第一章　労働力保全問題の史的展開
　第二章　社会政策と資本主義の発展
第二部　社会政策総論
　序言　政策論の構造と課題
第一編　社会政策論の系譜
　第一章　ドイツにおける社会政策論の系譜
　第二章　日本における社会政策論の現段階
第二編　社会政策の成立・発展および現実態
　第一章　社会政策の先行形態――初期資本主義労働政策とその課題
　第二章　社会政策の端初形態
　第三章　社会政策の発展形態――特に社会保険制度の必然性および限界性
　第四章　社会政策の高度発展形態――労働組合をめぐる社会政策の必然性および限界
　要約　社会政策の類型的発展段階と現時におけるその基本的性格
付論Ⅰ　社会問題
付論Ⅱ　社会政策

「編者あとがき」にものべられている通り、本書は、著者の理論的体系がほぼ確立したとみられる昭和一〇年以降の講義案のうちから生産力説批判を序説として講ずるに至った昭和一五年度から昭和一七年度にかけてのものを一部とし、昭和二四年以後のものを第二部としている。従ってそこに多少の重複のみられるのはやむをえないが、一貫して生産力説すなわち大河内教授の社会政策にたいするきびしい批判をみることができるのである。

とくに昭和二四年、いわゆる社会政策の本質論争の展開のもとでまとめられた第二部社会政策総論は白眉をなすものといえよう。序説政策論の構造と課題のなかで、著者は、マックス・ウェーバーをつぎのように批判する。

「社会政策・経済政策における価値判断からの解放とは、具体的には産業負担・社会的負

担からの解放を意味した。……彼の科学としての社会政策の積極的内容を構成するものは特に独占資本制のもとにおける巨大経営のための熟練労働力の培養、その陶冶への関心であり、大経営における労働過程の自然科学的実験調査、約言すれば社会政策論の労働科学への転化であった。すなわちマックス・ウェーバーにとっては、科学としての社会政策・経済政策は、帝国主義段階における世界市場獲得のための経済的・社会的条件を「没価値的」に検討すること、すなわち手段の適合性を検討し、その結果を予め測定し、そしてまた随伴的諸現象を考慮することを、その課題となすべきものであったのである。ウェーバーの没価値性論の積極的な面は、このように世界市場をめぐるドイツ独占資本主義の経済的、特に社会的要求との関連において、歴史的・必然的に規定せられたものであった」（一〇一頁）。まことにきびしいウェーバー批判ではないか。このようなウェーバー批判の上に立って、さらに大河内教授の社会政策論にたいする徹底的な批判を、第一編第二章第三節社会政策における生産力説批判の課題および第四節社会政策の本質把握の問題――方法論争の展開、のなかで展開している。社会政策論に関心を有する諸君の熟読をおすすめする。（未来社、一九六七年三月刊・A5・三九六頁・一、六〇〇円）　―飯田　鼎―

＊　＊　＊

森田鉄郎著『ルネサンス期イタリア社会』

この本は、これまで世界の多くの歴史研究者が幾度となくとりあげ、しかも定説を確立することができない「ルネサンス期の歴史的特質」という問題を、従来の諸研究を網羅的にとりあげて検討批判している。そればかりではなく、この本は、その社会的な背景と結びつけながら、ルネサンス期の歴史的特質をうきぼりにするという新しい角度からの分析を企てた労作でもある。

まずこの本はルネサンスとはなにかという問題提起をめぐって、ブルクハルトの古典的な研究をはじめ、最近の研究者をもふくめた多くの歴史研究者たちの主張と論争とを回顧

反省し、文化史的な角度からルネサンスの時代づけや本質の解明がいたずらにこの論争を混乱状態におとしいらしめていることを指摘して、むしろあまりにも多様である文化現象の具体的な諸相からはなれ、社会経済史的な角度から時代社会の構造にふれて、その中世社会や近代社会との異質性もしくは同質性を検討してみる必要があると考える。

その立場から、ルネサンスの社会経済史的背景をかたちづくっているイタリアの社会・経済的局面の分析をおこなうために、この分野における従来の研究を紹介し批判する。そこではいろいろの論点がえぐりだされているが、その主要な論点は、通説として、イタリア中世都市の繁栄が経済的基盤となって、ルネサンス文化がうみだされたと考えられてきているが、はたしてこの主張は正当であろうか。そしてこの繁栄の基礎に資本主義の萌芽をみいだそうと努める主張があるが、そのような見解はゆるされるであろうかという疑問である。たとえば一五―六世紀の経済衰退期にルネサンスの興隆がおとずれたことを知るとき、むしろ退嬰的な商人像のなかにルネサンスの文化現象を把握することができ、これは通説に対する有力な反論となりうるであろうし、またルネサンスを資本主義の萌芽的な歴史的展開であるという見解に対しては、そのような先進性をもっていたイタリア経済がどうして一九世紀の後半まで、すなわちリソルジメント期まで近代化がおくれたのであろうかという疑問をさしはさむこともできよう。つまり先ほども述べたように、ポーポロ・グラッソ（あぶらぎった市民）という呼び名が物語る退嬰的な商人像のなかにルネサンスの文化現象を見いだすとき、そこに近代的な産業人の姿を想像することはできず、むしろこのことは、当時の経済の本質が決して近代資本主義の基盤にたっていなかったどころか、その方向にさえむかっていなかった事実があったがゆえに、その後の経済的な発展が阻止されてしまったといえるのである。

このような疑問をあきらかにするために、ルネサンス期における北部および中部イタリア諸都市の工業的繁栄を代表する産業を毛織物工業と絹織物工業と考えて、これら工業のなかにはたして資本主義的な萌芽を見いだすことができるであろうか、そしてこれら工業がはたして資本主義への傾斜を示していたであろうかについて検討している。その結果、もっとも資本主義的な性格をもっていたと考えられているフィレンツェの毛織物工業と絹織物工業についても、資本主義的産業とよぶ要因は存在せず、むしろギルドの強い枠組にしばりつけられたものであり、そのような規定は不当であると述べ、ましてフィレンツェよりもギルド的な手工業性を強く示していたほかのイタリア諸都市の織布工業は、資本主義的産業とよぶ状態からほど遠いものであったと述べている。さらにもっと積極的に、イタリア中世都市の織布工業は今日の資本主義の形成とほとんど共通性をもたないものであるとも主張でき、そのような理由があったからこそ、その後のイタリア経済は一九世紀の後半まで衰退の一路をたどっていたと主張している。

ここでこのようなイタリア中世都市の繁栄とその後の発展をはばんだものはなにであろうか、すなわちイタリア諸都市の工業が高い生産力をもちながらも中世的なギルド的性格を脱皮して、近代的産業に転化しえなかった原因はなにであったかという問題が生ずる。それはイタリア社会の特殊性に根ざしているとみる。というのは、そこでは古代以来の伝統的な都市国家体制のもとに、農村地帯が都市の支配圏のなかにあり、都市と農村のあいだには二元性がみられず、都市がつねに地方の諸勢力の中心でありつづけた性格が、農村社会において農業の商品生産化をさまたげ、停滞化させてしまい、その結果、首都的な都市やそのなかに存在するギルドの中世的な拘束をはねのけて近代的な繁栄をになう新しい要素が農村社会に生いたってくる過程が閉ざされてしまったからであると分析している。

さて、わが国において、ややもすれば、ルネサンスを単純に人間解放＝近代化というかたちで、きわめて一般化された観念的な図式で理解する風潮があるが、そのような見解がきびしい歴史的分析において、いかに浅薄なものであるかをこの本を一読して知ることができよう。同時にルネサンスにおける現象が、中世から近代への歴史的推移のなかで、その一般的な傾向をさきがけた現象として理解す